

4年・国語「初雪のふる日」

## 雪～安房直子さんの本 ブックトーク

今年はたくさん雪が降りましたね。みんなは雪が好きですか？

雪をよく見たことがありますか？よくよく見ると・・・何が見える？→雪の結晶

雪の結晶を見て、谷川俊太郎さんはこんな詩を書いています。（2年スイミー・3年どきん）

『きらきら』読む

今日は暖かいですが、雪が降ってきた様子が想像できましたか？

では、雪はどうやってできるか知っていますか？

『雪の結晶ノート』ちりが芯に・・・

実際の大きさは（これ）1mm以下のものから大きいもので6mmのものもまれにあります。

星型・板・柱のような結晶がありますが、なかなか完全な形はありません。

普通六角形ですが、ふたご、こぶつき、合体したものなどもあり、

まったく同じ雪の結晶はありません！！

もう今年は降らないかもしれませんが、雪の結晶の観察の仕方も載っています。

覚えておくと、冬が来るのが楽しみになるかも・・・

こんなにきれいな雪の結晶を初めて撮影したのが、アメリカ人のウィルソン・ベントレーです。

『雪の写真家ベントレー』ベントレーさんは2.3年しか学校に通っていません。ほかの子供たちが雪で遊んでいるときも、古い顕微鏡で雪を観察していました。美しい雪の結晶をみんなに知ってもらいたいとスケッチしますが、書いている間に消えてしまいます。17歳のときにやっと顕微鏡つきカメラを買ってもらいますが、雪の結晶の撮影はなかなかうまくいきませんでした。2度目の冬にやっと成功しますが、周りの人には興味をしめされず、笑われてしまいます。

それでもベントレーは撮り続けました。そのおかげで、科学者たちに認められ、雪の結晶の写真集ができました。なんとベントレーが66歳のとき。その写真集を手にして、1ヶ月で亡くなってしまいました。

雪がたくさんたくさん降ると・・・

『おかしなゆき ふしぎなこおり』こんな形に積もることがあります。途中まで読む。

雪の足跡クイズ！！これはなんの動物の足跡でしょうか？（文を隠して）

いろいろな形の雪がありましたが、雪の降る日にはいろいろなお話があります。

『雪窓』安房直子

ある寒い夜、雪窓という屋台のおでん屋さんに「ふるふるの三角のものください」と一人のお客さんがやってきます。プルプルの三角というとは？→こんにやく

そのお客さんはなんとタヌキ。そのタヌキはおでん屋さんに憧れていて、弟子にしてもらいます。

そんなある日、おでん屋に赤いかくまきを巻いた娘がやってきます。その娘は閉店間際の暗い寒い寒い夜に、大雪が積もっている山の向こうから来たというので、タヌキは雪女だぁ～と怯えます。

でも、おでん屋のおじさんは死に別れた、娘のような気がしてなりません。おじさんはまた、かくまき

の娘に会いたくて、雪の中、重たい屋台を引いて、山を越えて隣村へ行こうとします。山では子鬼も出てきます。

さて、この明るいかわいい女の子は雪女なのでしょうか？それとも・・・

気付いた人はいますか？このお話はみんなが今、習っている『初雪のふる日』を書いた安房直子さんの物語です。ここからは安房直子さんの本をどんどん紹介していきます。

ふしぎな世界を想像してみてください。

雪女??の次は風の子です。

『ひめねずみとガラスのストーブ』風の子はみんな厚いマフラーをして、アンゴラの手袋をはめ、皮のブーツを履いています。それでもやっぱり寒いと思う日があって、寒がりな風の子フーはとびきり上等のガラスのストーブを買ってきます。みんなに笑われないように、一人静かに森の中でストーブに当たっていると、ちっちゃなひめねずみがやってきました。フーとひめねずみはそのストーブであたたかい食事とあついお茶を飲んでなかよしになり、いっしょに暮らし始めました。

でも、幾日か過ぎたころ、外国人の風の子がやってきて、外国の話をしします。フーは風の子です。外国に行きたくなりました。

さあ、フーはひめねずみを置いて旅に出るのでしょうか？もし、行ってしまったら、ひめねずみとガラスのストーブはどうになってしまうのでしょうか？

次はきつねのお話です。

『きつねのゆうしょくかい』きつねの女の子はあたらしいコーヒーセットを買ったので、お客さんを呼びたくなりました。それも、仲間の動物ではなく、人間のお客さんを呼びたいのです。でも、人間に知り合いはいません。お父さんは人間に化けてお客さんを探しに山道を下りて行きました。道で出会った人にいきなり「今夜うちで夕食会をします。たくさんご馳走します。」と言って、逃げられてしまいました。

さて、きつねの家にお客さんは来てくれるのでしょうか？そして、どんな夕食会になるのでしょうか？

黄色いきつねが出てきたので、黄色い『たんぼぼ色のリボン』を紹介します。

ある町におじいさんが売っている、「たんぼぼ堂」という小さな文房具屋がありました。その文房具屋は、かわいいシールや匂いのついた消しゴムなどは置いていない、昔ながらの文房具屋でした。その為、町の人たちは新しくできた大きい文房具屋に行ってしまうと、おじいさんはちょっとさみしい思いをしていました。

そんなある夜更けに黄色い服を着た小さい女の子がやって来て、文房具に黄色いリボンを巻くと、良く売れるよと言って、一つ一つに結んでくれました。

その言葉通り、文房具は飛ぶように売れて、売り切れてしまうほどでした。その上、このリボンはただのリボンではなく、身につけると、体が軽くなる不思議なリボンでした。

この女の子はいったい誰なののでしょうか？なぜ、体が軽くなるのでしょうか？

軽くなると言えば、この『花豆の煮えるまで（小夜の物語）』に出てくる小夜は山んぼの娘で、風になることができました。家は温泉宿で、おばあちゃんとお父さんの3人家族で、お母さんの山んぼは小夜を産んでしばらくすると山に帰ってしまいました。

温泉宿の名物の花豆を煮ている間に、小夜はおばあちゃんから、山んばのお母さんと、人間のお父さんとの出会いの話を聞きました。

とてもおちついた題名と表紙の本ですが、風になって、山を駆け巡ったり、鬼の子と遊んだり、木の精と話したり、とても活発な女の子の話です。少し字は小さいですが、6話に分かれているので、読みやすいです。

では最後に、読んだことがある人もいると思いますが、これも、安房さんの作品です。風のように踊る『うさぎのくれたバレエシューズ』を読もうと思います。(ビッグブック)

安房直子さんのファンタジーはどうでしたか？

動物と話したり、自然と会話したり……。普段は感じない世界に行ってみてください。

#### ブックリスト

きらきら	アリス館
雪の結晶ノート	あすなろ書房
雪の写真家ベントレー	BL出版
おかしなゆき ふしぎなこおり	ポプラ社
雪窓	偕成社
ひめねずみとガラスのストーブ	小学館
きつねのゆうしょくかい	講談社
たんぽぽ色のリボン	小峰書店
花豆の煮えるまで-小夜の物語-	偕成社
うさぎのくれたバレエシューズ	小峰書店